



公益財団法人

日本AED財団

The AED Foundation of Japan

News Letter Vol.11

2021年11月

## 救命現場で発揮された子どもたちの力

心臓突然死の多くは心室細動という不整脈で起こり、その救命に電気ショックが不可欠である。最初は病院内の医師が、やがて病院外で救急救命士が、そして2004年から一般市民でもAEDを使えば電気ショックを行えるようになった。しかし誰もがそれは大人にしかできないことと思いついていないだろうか。その思い込みを覆す事例を報告したい。

### 14歳の中学生たちが心停止に陥った教師をAEDで救命！

#### 休日の中学校で、1人の教師が倒れ、そこには生徒たちしかいなかった

2021年5月3日、鎌倉市立第一中学校は祝日で閑散としていた。それでも体育館では、朝の9時から男子バスケットボール部の練習が始まった。3年生4人、2年生5人のほか、新しく加わった1年生10人ほどが、顧問のA先生指導の下で練習に励んでいた。



A先生が笛を吹いて、その合図で部員たちが動くといった練習をしていた10時半少し前（推測では10時25分か26分頃）、急にその笛が鳴らなくなった。不思議に思った部員たちがあたりを見回すと、体育館の入り口近くでA先生が壁に寄りかかって、崩れるように倒れていくのを目撃した。

驚いた生徒たちが駆けつけると、A先生はうつ伏せに倒れ、けいれんしているように見えた。声をかけても反応がない。息もしていそうにない。そばにいた2年生の小野蒼平君（当時14歳）が、「先生、大丈夫ですか？」と叫ぶも反応はない。A先生を仰向けに直しながら手首を触ると冷たく、脈もなさそうだった。倒れて30秒も経たないうちに、小野君は「心臓がやばい、やらなきゃ」と迷うことなく胸骨圧迫を始めた。3年生の大森一輝君（14歳）もすかさず人工呼吸を開始した。

#### 誰も電話を持っていない

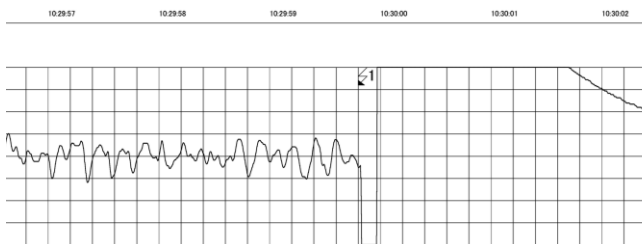
ほぼ同時に2年生の江藤晴空（はるか）君（13歳）、高橋映瑠（はる）君（13歳）ら5人が電話連絡に走った。同校では携帯電話の持ち込みは禁じられていた上、あいにく当日は休日のため校内にはA先生以外に大人は誰1人おらず、また職員室は休みでカギがかかっていた。仕方なく学校の外に駆けて行くと、たまたま校門を出てすぐのところ、5月の連休で鎌倉を訪れていた20～30代の女性を見つけた。高橋君が事情を説明して携帯電話を貸してもらい、江藤君が10:28（消防署確認）、119

番に通報して救急車を要請した。そのまま電話を切らずに体育館に戻ったが、指令室からの電話指導を必要とするまでもなく、生徒たちはすでに救命処置を始めていた。



### 初めて触る AED

大森君と小野君の必死の救命努力でも A 先生の容体は一向に戻る気配がない。「まずい、AED を取りに行かなくては」と3年生の伊藤葉月君(14歳)が思いついた。学校に AED は2台あり、玄関と体育館入り口に配置されていた。体育館の AED は A 先生が倒れた場所から 5~10m しか離れていないところにあつたので、すぐにそれを取って引き返した。戻って電源を ON にした時刻は AED の記録によれば 10:28:55 であった。伊藤君はこれまで AED に触ったことはなかったが、以前に保健の授業で教えてもらったことを思い出し、パッドを貼る位置が描いてある絵を見ながら A 先生の胸にパッド電極を貼った。「電気ショックが必要です」という音声の流れ、指示に従って皆が離れたところで、10:30:00 ショックボタンを押した。A 先生の身体が一瞬バーンと浮き上がった。



その後も胸骨圧迫と人工呼吸を続けていると、再び音声指示が流れ、それに従って 10:32:54、2 回目の電気ショックをかけた。

それでも A 先生の意識が回復する様子はない。不安が募る中、「迷っているくらいだったら、とにかくやろう」という思いで、ひたすら「強く、速く、絶え間なく」と念じながら胸骨圧迫と人工呼吸を続けた。救命処置は伊藤君も含めた3人が中心となったが、彼らだけでなく、入部したての1年生も、伊藤君の指示に従ってボールの片付けや体育館入口のスノコを撤去するなど、救急隊がスムーズに入れるように協力した。

10:35:34、AED からショック不要の音声の流れた。しかし反応がないので胸骨圧迫は続けた。そして 10:38:02 にも、もう一度、ショック不要のメッセージがあり、伊藤君の心の中に「もしかしたら」という思いが少しだけよぎったという。

### 通報から 11 分で消防車が来て、22 分で救急車が来た

中学校は海近くの小高い丘の上にあるが、通報を受けて最初に到着したのは鎌倉消防署の消防車で、10:39 だった。通報してから 11 分経って、白でなく赤い消防ポンプ車がやってきたことに、大森君は、「救急車じゃないのか」とちょっとがっかりしたという。(注:総務省消防庁では到着時間の短縮と救命率アップのために必要な器材と救命処置の技能を有する消防ポンプ車が救急車と連携して駆けつけて救命処置にあたるシステムを活用しており、本事例は実際のところ同システムが有効に機能した事例と言える。) いずれにしてもそこで江藤君は 119 番との通話を切り、校門近くですっと待っていた女性によやく携帯電話を返却することができた。



10:40 に隊員が倒れている A 先生のもとにかけつけたときには、周囲に大人は 1 人もおらず、生徒たちだけで 10 数分の間、必死に胸骨圧迫と人工呼吸を続けて疲労困憊していた。その場ですぐに隊員と交代した。A 先生に意識や発語はみられなかったものの、呼吸と脈が確認できたので、隊員は救命処置を中止した。

一方、救急車は、あいにく近くの鎌倉消防署のものはその時点では出払っており、少し離れた大船消防署今泉出張所から 10:50、学校に到着した。救急車は A 先生を乗せると、11:02 学校を出発し、11:21 地元の総合病院に到着した。

### 救急車が去った後、教師たちが駆けつけた

当日は休日だったので、消防署からは市役所の守衛に学校関係者への連絡を依頼したが、生徒たちは生徒たちで、消防車が到着したあと、他の教師への連絡を急いだ。既に携帯電話は持ち主に返却した後だったので、職員室の電話を何とか借用しようと考えた。職員室のドアにはカギがかかっていたが、コロナ対策での換気のためドアの上の窓だけは開いていたので、そこから何とか中に入ることができた。室内にあった電話を使ってまずは小野君が自分の親に電話を入れた。親から女子バスケットボール部の顧問の先生の電話番号を聞き出し、その番号をかけたが、あいにく校外での大会中でつながらなかった。そこで今度は 3 年生が代わって電話するなどして何とか別の教師に連絡をとることができた。その後、たまたま仕事をしに来た教師や、連絡を受けて駆けつけた教師らが学校に集まってきたが、いずれも救急車が去った後だった。

居合わせた生徒たちが教師から事情を聴かれているうちに、病院に搬送された A 先生の意識が回復したらしい、という連絡が学校に届いた。それ

を聞いた生徒たちは思わず「ワーッ」と歓声をあげたという。その生徒たちが当日やっと帰路についたのは午後 1 時か 2 時頃だった。

A 先生はその後順調に回復して無事退院し、5 月末には通常の勤務に復帰した。久々に生徒たちと再会した際、A 先生は「本当に助けてくれてありがとう」と告げたという。後日、A 先生は「与えられた命。教育に人生をかけて子どもたちを伸ばしていきたい」と述懐している。

### 2 年生のときの救命授業が役立った

同校では以前から、毎年 2、3 月頃に鎌倉消防署員が出向いて合計で 3 時間程度の救命講習をしていた。しかし令和 1、2 年度はコロナの影響でそれは中止となり、かわりに保健体育の高山雅彦教諭（28）が教科書に沿って 2 年生を対象に救命授業を行っていた。とくに今年は鎌倉市内での教育関係の研究発表にあたっていたこともあり、2 月から 3 月にかけて、2 年生 2 クラスの生徒に対し、それぞれ約 1 時間ずつ 4 回にわたって指導した。ところがやはりコロナの影響で消防から AED やマネキンを借りることができず、仕方なくマネキンなしでの訓練となり、AED についてはプロジェクターをそれに見立てて使用するなど工夫を要した。加えて高山教諭が取り入れたのは、ロールプレイという学習法だった。YouTube などの動画を見せたあとで、4、5 人を 1 グループにして、患者、連絡係、救助係などの役に分かれて、実際の場面を想定しながら訓練を行った。

およそ 2 ヶ月後、その学年が 3 年生になって 1 ヶ月後に今回の場面に遭遇し、練習が功を奏した形となった。実際のところ生徒達は誰も胸骨圧迫や人工呼吸をマネキンで練習しておらず、また AED にも直接触っていなかったわけで、それにもかかわらず、ロールプレイだけで要領を体得し、本番

で再現できたのであった。この役割分担で訓練したときの感覚がとっさの場面で、今度は部活のチームにおいて活かしたことは明らかだった。



大森君(14)



伊藤君(14)



小野君(14)

その授業を受けた伊藤君は、「胸骨圧迫の練習は机の上でやり、先生から『強く、速く、絶え間なく』というのを覚えておけと言われた。何回も繰り返してやって、動画も見て、そのあとテストにも出たので結構頭に残っていた」「その事故の日は混乱していたけれど、とにかくがむしゃらに、その3つのことを意識しながらやった。完璧だっ

たかどうかはわからないけど、助かって良かった」と述べている。

大森君は授業を振り返って「僕のグループでは持久走時にいきなり倒れたらどうするか、というのをやりました。そのとき僕は救助係でしたが、シミュレーションをしている様子を動画で撮って皆に見てもらって意見を言い合うようなことをしました」また AED については「AED に見立てたほかの機械でやりました。AED が話す、ということもそのとき教えてもらいました」と語っている。一方、A 先生に対する胸骨圧迫を最初に始めた 2 年生の小野君は、進級した直後ということもあり、救命授業をまだ受けたことがなかった。それでも 1 年生のときに何となく関心があって「保健体育の教科書をペラペラって読んで、やり方をチョロっと読んだくらい」で、胸骨圧迫ができたという。

## 理事長からのコメント

教師が心停止になった生徒を救った事例は少なくないが、中学生が生徒たちだけで教師の命を救った、という話を聞いたことがない。しかも 14 歳の中学 3 年生が初めて触った AED のショックボタンを押して救命につなげたことには驚かされた。子どもたちの計り知れない底力を見せつけられた次第である。

彼らは、頼れる大人のいない、どうしようもない不安の中で、助けられるかどうかもわからずに、ひたすら可能性だけを信じて、ただやるしかない、と力を尽くしたのである。オロオロしたり、じっと見ているだけでは済まされない緊迫した場面で、迷わず生まれて初めてのの実体験に突入したのであった。彼らにとっての心の重荷はどれほどのものであったろう。

コロナでソーシャルディスタンスという言葉が蔓延する中、同じスポーツ部に属する部員たち 1 年生から 3 年生までが、とっさの場面でうまくチームワークを発揮できたことも称賛に値する。連絡が困難な状況下で、学校の外に携帯電話の確保に走ったり、職員室の電話を使うために窓から侵入したことなども、それぞれが不可欠で果敢な行動であった。生徒達の自主的で迅速な行動能力や機転には本当に驚かされたが、それを育んだ親や学校教育の力も大きいだろう。

今回の救命は夢のような快挙に違いないが、まさに日本 AED 財団が目指していた展開であり成果であったともいえる。そもそも学校における生徒への救命教育については、財団の働きかけもあって、2017 年の学習指導要領改訂に反映され、中学では心肺蘇生は「理解を深める」だけでなく、「行うこと、でき







ること」が求められるようになり、また AED についても、以前は「必要に応じて触れる」程度であったのが、「実習を通してできる」ように、という指導に進化した。その全面実施はまさに 2021 年度であり、この中学で救命授業が行われたのはその直前のことだった。ただ授業では人工呼吸までは必須でないと高山教諭が説明していたが、使用された教科書には人工呼吸法の記載があり、実際に生徒たちもそれを実施していた。結果的には良かったものの、初心者の生徒たちに対しては胸骨圧迫に専念できるよう、より簡単で最小限の知識理解を促す内容が好ましいように個人的には思えた。

それよりもこのコロナの時期、満足な訓練用具も使えない厳しい制約のなか、時間をかけてポイントを繰り返し強調し、グループに分かれてロールプレイを行い、それを皆に供覧し意見を述べ合い、テストまで行って生徒たちの心と身体に染みこませた教師の技量と努力は高く評価されよう。学校における救命講習の有用性が実証された、という意味でも極めて重要かつ貴重な模範事例と言える。

コロナ禍の中での取材は苦労も多かったが様々な方々に協力をいただいた。大活躍した生徒たちはもちろんのこと、取材にご理解いただいた保護者の方々、授業における指導内容などを親切に教えていただき、生徒たちとの Web 面談の機会を与えて下さった学校の先生方、また正確な時刻など客観的情報を提供いただいた鎌倉消防署や日本光電の方々、そして取材を側面から支援いただいた財団の今井評議員と松岡実行委員にも深く感謝申し上げます。

「中学生たちだけでも人の命を救える」このメッセージを広く全国民にお届けしたい。

## 救命現場での子どもたちの活躍事例

実はこれまでも子どもが大人に混じって救命現場で大きな働きをした事例が散見されている。

2009 年 7 月 31 日深夜、都内の自宅で父親が心停止した際、母親が救急指令室から口頭指導を受け、それを小学 6 年生の息子（11 歳）に伝えて胸骨圧迫を行わせ、救急隊につないで救命に成功した。

2014 年 4 月 18 日、名古屋市内の地下鉄駅改札口で心停止した 60 代の男性に、高校 1 年生の墨優華さんが、「誰もやらないなら私が」と AED を使って救命した。

2015 年 1 月 18 日、萩市で行われた駅伝大会中に 65 歳の男性ランナーが中継所で心停止を起こし倒れた際、後を走っていた中学 3 年生の的場浩一郎君（15 歳）が、200m ほど離れたスイミングスクールに AED を取りに走って届け、救命に貢献した。

2018 年 6 月 29 日、都内の飲食店で 70 歳の男性が心停止で倒れた現場に居合わせた石井和子さんらは、胸骨圧迫を開始すると同時に、石井さんの息子で小学 4 年生の斗和君（9 歳）に近くの銭湯まで AED を取りに行かせ、それを使って救命につなげた。

2019 年 7 月 30 日、横須賀市の自宅で夕食後に心停止で倒れた 42 歳の父親に対し、1 年前に学校の救命教室で習った胸骨圧迫を長男で小学 5 年生の優輝君（11 歳）が行って救急隊につなぎ、無事救命できた。

2021 年 7 月 6 日、西武新宿線狭山駅前ロータリーで行われていた東京五輪の聖火リレー会場で 70 代男性が倒れた。それに気づいた落合佐和子さんが、すぐに長女の瑠子さん（11 歳）ら子ども 3 人に近くの自宅マンションに設置されている AED を取りに行かせ、無事に救命を果たすことができた。